

松本市出川南B遺跡

—緊急発掘調査報告書—

1989・3

松本市教育委員会

松本市出川南B遺跡

—緊急発掘調査報告書—

1989・3

松本市教育委員会

序

南松本駅の周辺は戦中・戦後の新開地として発展し、今では各種の工場・事務所、それに一般住宅などが立ち並ぶ松本市南部の商工業の中心地として栄えておりますがその一方で、以前より建設工事の際に古代の土器などを出土するところとしても知られてきました。今回対象の出川南遺跡はこの南松本駅の南方にあたり、当市教育委員会では既に昭和61年度に市営住宅建設に先立って発掘調査を行い、弥生時代から平安時代にかけての住居跡や多くの遺物を発見しています。

今回の調査は社会体育施設整備の一環としての松本市南部体育馆建設に先立つもので、5月下旬から6月にかけて実施いたしました。結果は本書に示したとおり、古墳時代から平安時代にかけての遺構や遺物が発見され、前回の調査同様、古代の人々の生活の場であったことが立証されるという意義深いものです。思うにこの一帯は、東方1.5kmの山上に弘法山古墳を仰ぎ見、田川、穴田川の水利に恵まれ、豊富な湧水に支えられ、原始・古代からの生活の適地だったのでしょう。

当遺跡、あるいはその北に続く出川遺跡の一带は市の南部地域の再開発などで今後も小規模な発掘調査が続くものと思われますが、本書が僅かなりともその指針になれば幸いです。

最後になりましたが、今回の調査の実施に御尽力頂いた関係各課の皆様、実際に現場作業に従事して御苦労頂いた皆様に心からなる謝意を表して序といたします。

平成元年3月

松本市教育委員会教育長 中島俊彦

例　　言

- 1 本書は、昭和63年5月23日より7月12日にかけて行なわれた、出川南遺跡　B地点 第1次調査報告書である。
- 2 本調査は、松本市南部体育馆の建設に先立って行なわれたもので、松本市教育委員会が実施した。
- 3 本書の執筆は下記の者が担当し、その他については高桑俊雄が担当した。

第1章 事務局

第2章 第1節 太田守夫

第2節 神沢昌二郎

第3章 第2節 松沢利幸

第3節 直井雅尚

- 4 本書作成に関する作業の分担は次の通りである。

編集：滝沢智恵子

遺物、図整理：百瀬二三子、米山明子

遺構図トレース：石合英子

遺物実測、トレース：土橋久子、松尾明恵

一覧表作成：土橋久子

- 5 出土遺物及び図類は松本市教育委員会に保管してある。

目 次

第1章 調査経過

第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査体制	1
第3節 作業日誌	3

第2章 遺跡の環境

第1節 地形と地質	5
第2節 周辺遺跡	9

第3章 調査結果

第1節 調査の概要	13
第2節 遺構	
1 住居址	14
2 土壙	15
3 ピット	15
4 溝址	15

第3節 遺物

1 土器	23
2 その他の遺物	28

第4章 調査のまとめ	30
------------	----

挿図目次

第1図 調査地の位置	2	第9図 土壙・ピット(3)	19
第2図 土層	7	第10図 土壙・ピット(4)	20
第3図 周辺遺跡	8	第11図 溝址	22
第4図 全体図	11	第12図 出土土器(1)	25
第5図 第1号住居址	14	第13図 出土土器(2)	26
第6図 遺構配置図	16	第14図 出土土器(3)	27
第7図 土壙・ピット(1)	17	第15図 その他の出土遺物	28
第8図 土壙・ピット(2)	18		

第1章 調査経過

第1節 調査に至る経過

出川南遺跡はJR南松本駅南方100~400mの、松本市芳川平田・出川・芳野・双葉の各地区にまたがって広がり、その中央をJR篠ノ井線が南北に縦断している。以前から建設工事等にともなって少量の遺物の出土があり、昭和61年に篠ノ井線の東側で市営住宅建設に先立って行われた発掘調査では、弥生時代から平安時代までの遺構と遺物の発見がなされている。

今回の調査は篠ノ井線の西側、旧芳野町市営住宅跡地に公民館・図書館分館等の社会教育施設と合せて、社会体育施設整備事業の一環として松本市南部体育馆建設の計画がなされたことに端を発する。前述のとおり建設予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地であったので、昭和62年9月に関係各課間で当該文化財の保護のための協議を実施した結果、工事前に発掘調査を行い記録保存を図ること、発掘調査の実施時期は昭和63年4月から6月までの間を予定することが確認された。これに基づき松本市教育委員会が直営事業として緊急発掘調査を実施することとなり、昭和63年5月25日に出川南遺跡埋蔵文化財発掘調査の通知を提出した。

第2節 調査体制

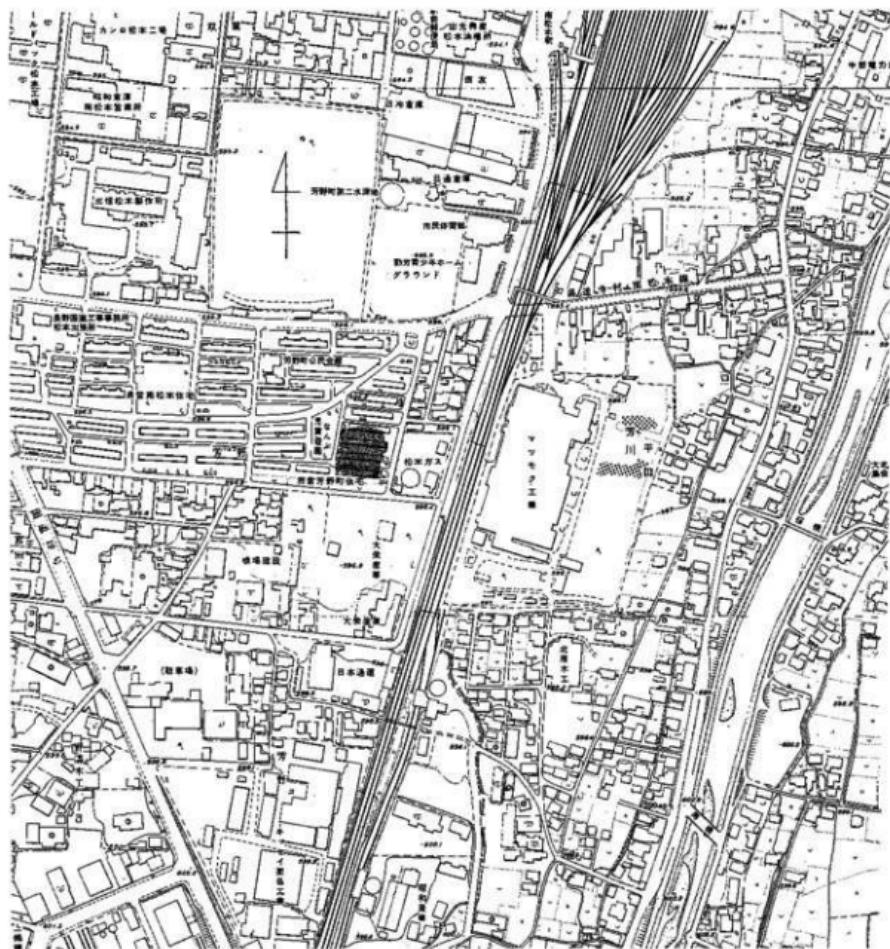
調査団長：中島俊彦（教育長） 調査担当者：神沢昌二郎（市立考古博物館長）

現場担当者：高桑俊雄 新谷和孝 松沢利幸（社会教育課埋文担当）

調査員：太田守夫

協力者：赤羽章 荒井唯邦 石合英子 今村嘉子 大谷成嘉 奥原富藏 小野勝近 小野光信
莊秀也 濑川長広 武井緑 田多井亘 中島新嗣 中村悦子 原沢一二三 藤本利子
丸山久司 丸山誠 麦島安夫 村山正人 百瀬義友 矢島利保 横山篠美 米山明子
米山楨興 若井七十郎

事務局：浅輪幸市（社会教育課長） 田口勝（文化係長） 熊谷康治（主査）
直井雅尚（主事） 山岸清治（事務員） 三沢利子



「松本市基本図」 (昭和55年測量)

0 50 100 150 200m

今調査地

昭和61年度調査地

第1図 調査地の位置

第3節 作業日誌

- 昭和63年5月23日 ㈪ 雨 プレハブ設営。市教委：高桑、新谷（以下同）
- 5月24日 ㈫ 晴 重機による表土剥ぎ。
- 5月25日 ㈬ 晴 重機による表土剥ぎ継続。機材搬入。
- 5月26日 ㈭ 晴 重機による検出継続。
- 5月31日 ㈫ 晴 造構検出作業開始。周辺住民へのビラ配布。作業員：若井七十郎他5名（以下作業員数のみ記載）
- 6月1日 ㈬ 晴 検出作業継続。測量用座標設定。作業員：7名
- 6月2日 ㈭ 雨 雨のため作業中止。
- 6月3日 ㈮ 雨 雨のため作業中止。
- 6月6日 ㈪ 晴 雨による崩土の除去。検出作業継続。作業員：6名
- 6月8日 ㈬ 晴 検出作業継続。調査区周辺の杭打ち。作業員：7名
- 6月9日 ㈭ 晴 検出作業継続。杭打ち継続。作業員：7名
- 6月10日 ㈮ 晴 検出作業終了。1号住居址より掘り下げ開始。作業員：8名
- 6月13日 ㈪ 晴 1住掘り下げ継続。土壤半割。作業員：7名
- 6月14日 ㈫ 晴 土壤半割継続。トランシットによる測量。作業員：7名
- 6月15日 ㈬ 晴 土壤半割継続。作業員：5名
- 6月16日 ㈭ 晴 1住東側の検出。全体図作成。作業員：8名
- 6月17日 ㈮ 晴 引き継ぎ、検出作業。溝へ3本トレンチを入れる。作業員：7名
- 6月20日 ㈪ 曇 溝のトレンチ掘り下げ作業継続。1住・土壤の土層図作成。作業員：8名
- 6月21日 ㈫ 曇 1住ベルトはずし。溝のトレンチ継続。作業員：9名
- 6月22日 ㈬ 曇 1住写真撮影。溝のトレンチ継続。土壤・土層図作成。作業員：4名
- 6月23日 ㈭ 曇 溝トレンチ継続。検出作業。土壤土層図作成。平面図作成開始。作業員：9名
- 6月27日 ㈪ 曇後雨 溝トレンチ3掘り下げ継続。午後、雨のため作業中止。作業員：7名
- 6月28日 ㈫ 曇 1住、床面精査。カマド写真撮影、カマド割り、土層図作成。溝トレンチ3
疊層まで掘り下げる。作業員：7名
- 6月29日 ㈬ 曇 平面図継続。午前中、太田先生來訪。作業員：1名
- 7月1日 ㈭ 曇 南西、北西、検出作業。作業員：5名
- 7月2日 ㈮ 晴 溝1の北、検出作業。住居址トレンチ掘り下げ。作業員：16名
- 7月4日 ㈰ 曇後晴 ピット半割、住居址トレンチ掘り上げ。土層図作成。作業員：24名
- 7月5日 ㈪ 曇 ピット半割作業継続。土層図作成。作業員：24名

7月6日 休 曇 ピット・土壤半剖、土層図作成。小豎穴掘り下げ、平面図継続。作業員：24名

7月7日 休 曇後雨 南側トレンチ掘り下げ。小豎穴掘り下げ作業継続。土壤・ピット写真撮影。
雨のため3時にて作業中止。作業員：23名

7月9日 (土) 晴時々曇 平面図継続。測量継続。作業員：5名

7月12日 (火) 晴 小豎穴土層図作成、写真撮影。ピット・土壤掘り上げる。平面図作成。道具
整理。遺物運搬。本日にて現場作業終了。作業員：16名

調査終了後は、報告書の作成のため遺物洗浄、注記、復元、拓影、実測、トレース、図整理、
原稿執筆を行なっている。



作業風景

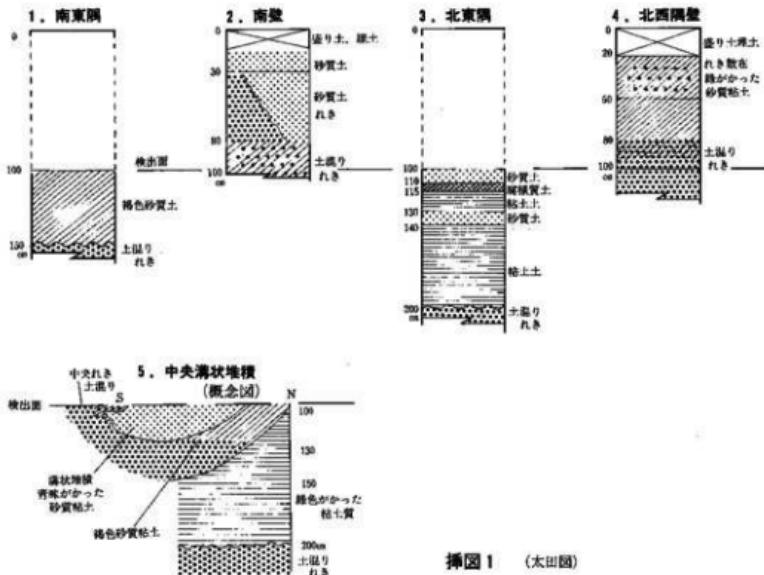
第2章 遺跡の環境

第1節 地形と地質

1 位置と地形

本調査地は市街地内の芳野町市営住宅跡地に当り、すでに自然地形の観察は困難である。地形上は田川扇状地と奈良井川扇状地の交錯した沖積扇状地性堆積の最末端に位置していて、東の田川、西の奈良井川の現河床との距離は、それぞれ約400m、約2000mである。遺跡の北方500~700mで、地下水位が高くゆう水がみられる。微地形的には出川町や南松本駅構内に続く凹地帯で、付近の地下水位は4.5mが報告されている。

また隣接地である旧マツモク構内（松本市文化財調査報告No.53）と本遺跡とは、JR篠ノ井線を挟んだ250mの近距離にあり、変化の多い堆積状況がよく似ている。



插図1 (太田図)

2 遺跡の堆積層

発掘地付近は、古くは桑畠の普通畠で、昭和30年以降宅地化したところである。したがって表土や一部の深部には、盛り土や掘り返しが行われている。これらのこと考慮にいれて、試掘や発掘面の地層から、まとめてみたのが挿図1である。狭い発掘地でありながらいろいろな堆積状況を示している。特に目立つものに、中央をN-S・N10°W・N60°Eと曲流する河床れき層と、この堆積の左側に沿って並行している溝状の堆積がある(挿図1-3)。この複雑な堆積を整理してみるとおよそ次のような堆積の傾向がみられる。

1. 表土は地ならし、盛り土、埋土で搅拌されている。それ以下は自然堆積層である。
2. 調査時の発掘面は、表面下1mで、その間の地層は一般に砂質である。
3. その中で南東部はれきにとみ、一部に河床れき(流れ)と思われる厚いれきの堆積がある。
これに対し北西部はれきが散在する砂質粘土の土層である。
4. また南東部と北西部に挟まれた北東～南西の間は、一般に砂質粘土が堆積し、粘質の高いところもある。
5. 発掘面下(-1~2m)には、上記の河床れき層と溝状堆積の下底がみられる。溝状堆積は深さ30cmで、褐色砂質土～砂質粘土・れき層を浸食し、堆積している。
6. 褐色砂質土～砂質粘土・れき層の下部は厚い緑色がかかった特徴のある粘質土で、発掘面の南西部から北東部にかけてもみられる。
7. れき層は南壁の表面より、30~100cmにみられるれき(1)、100~150cmにあって溝状堆積に浸食をうけているれき層(2)、粘質土の下部200cm以下にみられるれき層(3)がある。
8. これらのれき層をつくっているれきは、砂岩・硬砂岩・石英閃綠岩・チャート・粘板岩や石英粒を含むれき岩・泥岩・凝灰角れき岩の円礫で、一般に砂岩・硬砂岩は大れきで、石英閃綠岩は大・中・細れきにわたる。いずれも田川系統のものである。
9. 南壁のれき径は中れき・細れき、中央の河床れきは南壁に近いところで大れき(15×10~12×10cm)・中れき、曲流地点で中・細れき(5×2~3×3cm)で、溝状堆積では中・細れきと砂で土層と交錯した地層をつくる。れき層(1)のれきは中・細れきで、細れきの方が多い。

3 地形の形成と遺跡の立地

以上の堆積状況を地形の形成からみると、次の順序を考えられる。

1. 第3れき層の堆積
 2. 緑色がかかった粘質土の堆積
 3. 第2れき層の堆積
 4. 褐色砂質土～砂質粘土の堆積
 5. 溝の浸食——堆積
 6. 第1れき層の堆積
- 遺跡遺物
} 同時異相か
7世紀

7. 砂質土・砂質粘土の堆積

8. 表土・盛り土・堆土

この堆積状況の中で注目されるのは、溝状堆積と河床れき層（第1・第2れき層）である。

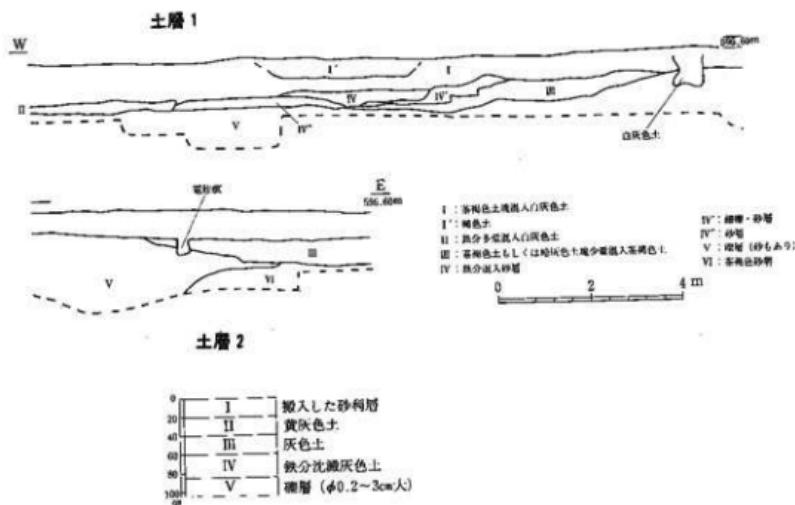
溝状堆積は第2れき層と褐色砂質土～砂質粘土を浸食してきた流れの堆積であると考えられる。溝の緩やかな傾斜や、青色がかった砂質土の堆積からみて、滲水性に近い流れと思われる。幅3～4m、深さ（厚さ）20～50cmの堆積状態をみると、青色がかった土層は、上部をれき層に覆われたり、れき層を挟在したりしている。れきは細れきがほとんどで、その中に中れきが含まれている。

発掘された遺構・遺物は、褐色砂質粘土層や緑色がかった粘質土層で発見されているので、溝状遺構は同時期か、あるいはわずか後の時期のものと思われる。

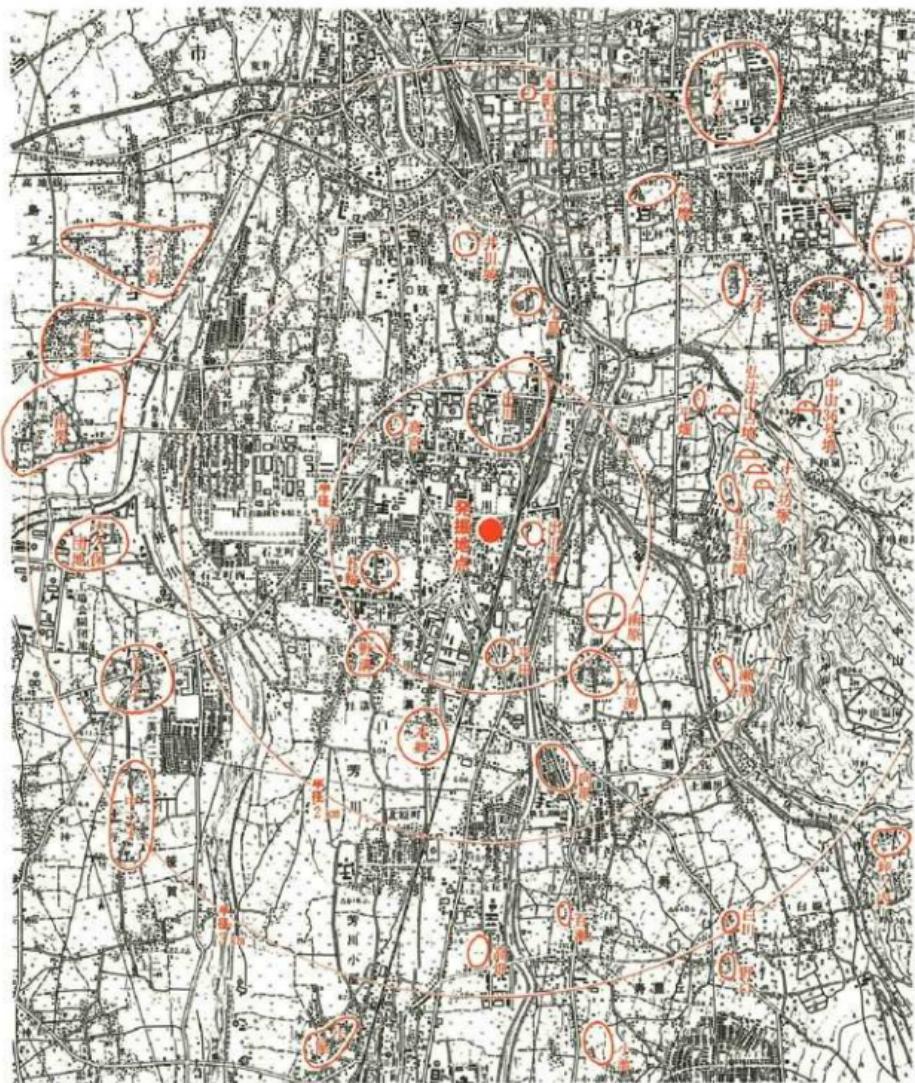
また溝は自然堆積の第2れき層（河床れき）に沿ってつくられた、用水路の可能性が大きい。

実際に上流に当る現在の平田地籍には、じあんどせぎなど、田川から取水した古せぎが多く、現在のJR篠ノ井線に沿って蛇行していた。発掘地付近でも明らかに、下流の南松本駅方面へ向かう流れが過去にもあった。このせぎ沿いには、土器類・須恵器・灰釉陶器の出土もみられる。また田川の破堤による流れの流下した場所でもある。

次に第1れき層と第2れき層との関係は、調査時に接点が不明であったため、確認できなかったが、もし連続するものとすれば、長い間の河床だったことになる。また溝状堆積の上部も、調査時に除去されていたため、観察できなかったが、さらに上部に延びるとすれば、発掘された遺構・遺物よりも後のものとも考えられる。



第2図 土層



第3図 周辺遺跡

第2節 周辺遺跡

本遺跡は標高597mあまりで、松本市の東部を北流する田川の西方およそ500mの住宅地内にある。この住宅群は昭和30年頃に開発されたもので、それまでは工場敷地、その前は桑畠であった地域である。本遺跡の周辺には多くの遺跡がある。出川南遺跡は出川遺跡の南側にあるとしているが、その範囲は割然と分かたれるものではなく、両遺跡を合わせると南北1kmあまりの広範囲の遺跡となる。この遺跡は田川の伏流水が浸透して湧出する小水流『出川』を利用して発展したものであり、弥生時代後半からの遺物が検出されている。出土地点で言えば踏切西、井川城、出川、精美堂、ステンレス工場敷地、高宮遺跡が含まれ、特に濃密な出土遺跡は南松本駅北西の旧ステンレス工場跡で、昭和15年頃の工場造成時には多量の土器片が出土している。

今回調査の地点から東側300mあまりの出川南A遺跡からは、弥生時代後期から古墳時代前期にわたる竪穴住居址2軒、平安時代前半の住居址3軒と土器・石器等を検出している。本遺跡のすぐ南側の県信用金庫敷地で、古墳時代後半の土師器を出土している。また北側では社会福祉センター・旧ボーリング場（現西友）の建設時には若干の土師器等が出土している。その北側は旧ステンレス工場と旧社宅になるが、昭和60年の発掘調査では弥生時代中期末の住居址1、同後期の土壙1基、古墳時代前期の溝1本、平安時代前・中期の住居址3軒等を検出した。遺跡の北方は泥湿地であつたのか遺構はなく、水田地帯を隔てて現市街地に続く。

東側は田川に牛伏川が合流してから並柳の集落に統くが、ここからは遺構・遺物の発見はなく、弘法山古墳の西麓に至って北側から平畠遺跡（縄文）、山行法師遺跡（縄文・古墳）、山裾を南にやや離れて瀬黒遺跡（古墳）がある。

南側は田川の右岸では北から南原遺跡（中世）・竹淵遺跡（中世）があり、昭和60年度に発掘調査を行ったが遺構・遺物とも少量であった。その南には向原遺跡（縄文・弥生・平安）があり、更に上流に遡ると河岸段丘の上に弥生時代中・後期の百瀬遺跡がある。百瀬遺跡は昭和26年に発掘調査され、竪穴住居址1と多量の土器・石器が検出され、土器は百瀬式として標識名になっている。小池にも百瀬遺跡の乗る段丘よりも一段上の段に、平安時代の遺構が出ている。

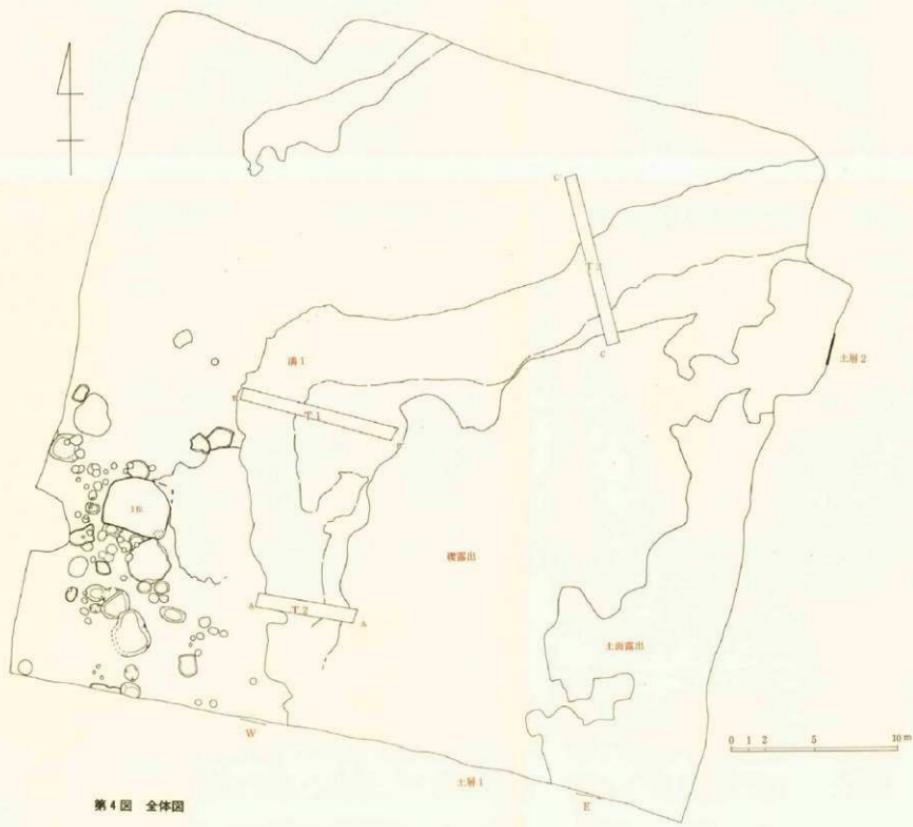
田川の左岸は本遺跡より南に平田遺跡があり、灰釉陶器が出ていている。その南の平田神社周辺は本郷遺跡で平安時代の土器片が採集されている。更に南の筑摩野中学校南は高畠遺跡で、昭和61年の調査では縄文晩期の土器棺墓1基、奈良・平安前半・平安中半の竪穴住居址各1軒を検出している。

西側は本遺跡の近くでは遺跡が無く、やや南に振って野溝の五輪に古墳時代の土師器、東原に古墳・平安時代の須恵器が出ている。3kmほど離れた奈良井川左岸の段丘上には縄文中期を主とする大久保団地遺跡、古墳から平安時代の島立南栗遺跡、北栗遺跡、三の宮遺跡と遺跡が全面に統いている。

北側は遺跡が無く、北東に主として古墳時代以降の遺跡が続く。まず和泉川を渡った棺護山には中山36号古墳の他3基の古墳があり、その下の集落と水田には奈良・平安時代の住居址10軒を出した神田遺跡がある。千鹿頭池の北側には千鹿頭北遺跡があり、古墳時代後期を中心とする66軒の住居址を出している。特に長廻甕が多く出土している。山際を北東に進むと林山腰遺跡があり、昭和62年度の発掘調査で、縄文時代後期の敷石住居址1軒の他、縄文時代中期初頭の家が2軒、平安時代の竪穴住居址1軒等を検出している。

薄川左岸の中流域では筑摩遺跡があり、弥生中・後期の土器片を出土している。更に薄川を渡ればあがた遺跡が弥生から平安時代にわたって広範囲に広がっている。

このように本遺跡は田川を中心として発達した遺跡の一群に属しているが、田川に注ぐ牛伏川は暴れ川で何回も氾濫して、田川をつきやぶって奈良井川まで達したほどであり、そのため覆土は厚くなっている。本調査範囲内にも旧河川のあとがあり、この地一帯が氾濫原であったことを示しており、ある時期微高地となったところに、居住していたものであろう。



第4図 全体図

第3章 調査結果

第1節 調査の概要

調査地は、もと芳野町の市営住宅が建てられていた場所で、調査に先立って上部の建物は既に壊され、整地されていた所である。上部の搅乱及び搬入土を取り除くと地表面から1.0~1.2mで茶褐色を呈する鉄分の沈殿した粘質の白灰色土、もしくはそのやや砂質の土層が広がってそれを検出面として調査することとした。だが上部の建物に関係した工事による、又、下水道からの長年にわたる雑排水の濡れなどが検出面に影響を及ぼし、特に後者はちょうど遺構の集中する場所に西から2本のヒューム管が埋設されており、鼻をつくにおいと検出面にしみ込んだ灰色の土層が周囲に融け込むようにして広がって当初は遺構との区別がつかなかった。調査面積は1715m²となる。

遺構には住居址、竪穴状遺構各1基、土壙26基、ピット61基等があり、これらはすべて用地内の南西四半部のみに集中する。又、中央部には溝（水路址）が南から北、更に東へとつづいているが大きく蛇行し、広がったり狭くなったりしている。流下した水路の勾配の少なさは水路末端のようすを示しているのか狭い範囲に見られた遺構群はこの水路を避けてすこしても高台に逃れた集落を考えると理解できよう。

今回の調査で得られた遺物はその多くが検出面からのものであり、遺構に属するものは少ない。これらは総量で天箱3箱分量である。ほとんどが土器類であり、古墳時代前期から平安時代迄の土師器、須恵器の甕・壺・壺などから、他に須恵器の皿・蓋、土師器の瓶・台付甕・ミニチュア土器などが見られる。その他の遺物としては筋轆車の円盤部、おもりがあった。

検出面は前述の如くの粘質白灰色土をとらえて広げはしたが、全域にはその土層が存在せず、それは遺構の多出した南西部から溝1の西及び北側に見られた。溝1の東側は礫層（鉄分沈殿）が広がり、さらに東（南東部）は土質の茶褐色土となる。遺物は少ないながらもほぼ全面に見ている。磨耗した遺物も多く、やはり溝1が関わったものと感じられ、そうするとこの上部（南側）には古墳時代を中心とする遺構の存在を推測することは難しくない。

第2節 遺構

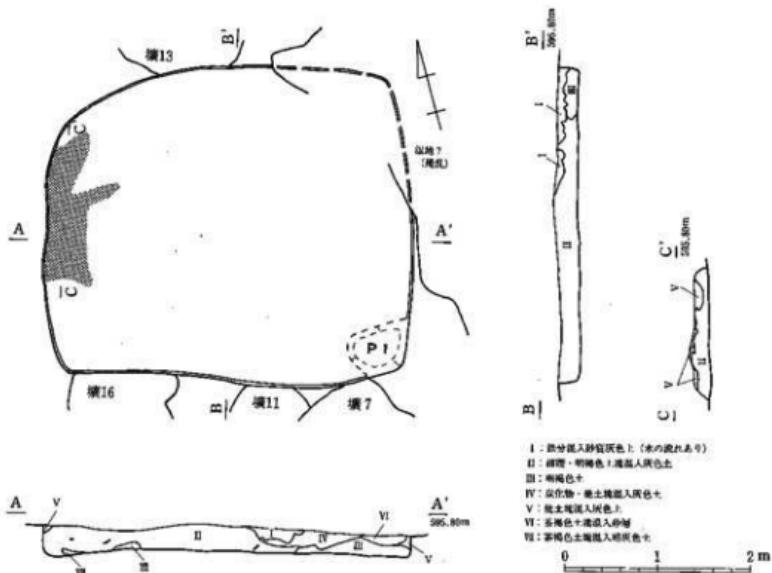
1 住居址

住居址は、調査区南西に唯一軒検出した第1号住居址がある。検出は土色が不明瞭な上、周囲の遺構との重複が多く、非常に手間どる。南壁は土壌7・11・16の一部を、北壁は土壌13を切っている。また東側には搅乱のような鉄分を多量に沈殿させた土層が広がり、本址北東部が破壊されている。プランは南北3.38m、東西3.96mを測る長方形だが、北西隅は他に比べ丸い。主軸方向はN-77°-Wを示している。床面は粘質白灰色土中にあり、平坦だが堅くはない。壁は直に立ち上がるが、不明瞭である。

付属施設はカマドとピット1個が検出された。カマドは床面上では明確な施設として捉えられなかつたが、西壁中央の覆土中、床面より15cm程高く焼土の広がりが認められこれを当てたい。袖等は土色の変化に乏しく捉え得なかったものと考えたい。ピットは南東隅に存在するが、本址に伴わない可能性もある。

遺物は土師器の小破片が40点程、覆土中より出土している。器形の復元できるものは全くないが、厚手の甕、内面黒色処理のされた壺があり、これらは古墳時代後期の特徴を示している。

本址の所属時期は決め手に欠けるものの、遺物より見て一応古墳時代後期と考えたい。



第5図 第1号住居址

2 土壌

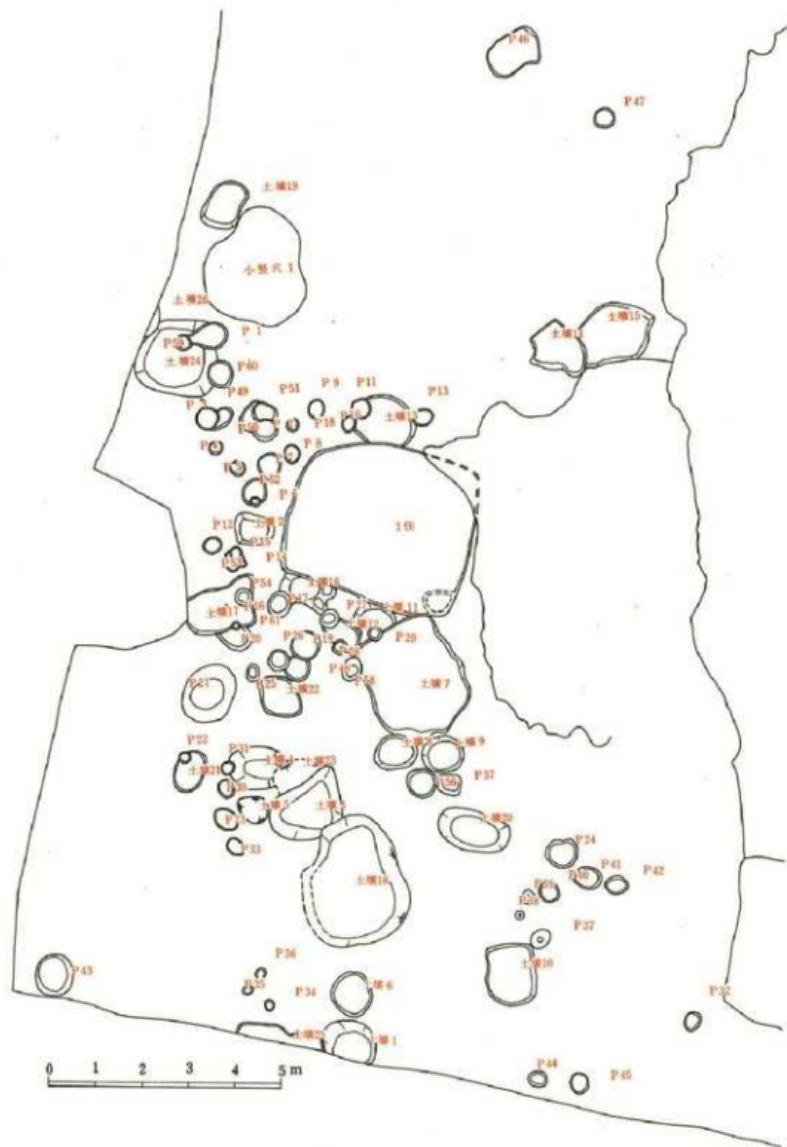
土壌は全部で26基検出した。これらはすべて調査区南西隅に密集している。平面形は大半が不整形をしており、規模は最大281×227cmから最小77×56cmのものまである。壁はほぼ直か斜め緩やかな状態である。覆土は、ほとんどが灰色をベースにする。遺物は24・25・26の3基を除き他のすべてから土師器を得ている。また3・4・5からは須恵器も見られた。このうち土壙1の覆土上～中層からは土師器壺が逆位で出土した。2と17からの遺物は、土師器壺（No.6）に接合できた。土壙は多くがピットと切り合い関係をもっているが、ほとんどの土壙がピットより古い。第1号住居址に切られる7・11・13・16も含め、少量の遺物からではあるが、大半の土壙は古墳時代後期以前のものであることがわかる。

3 ピット

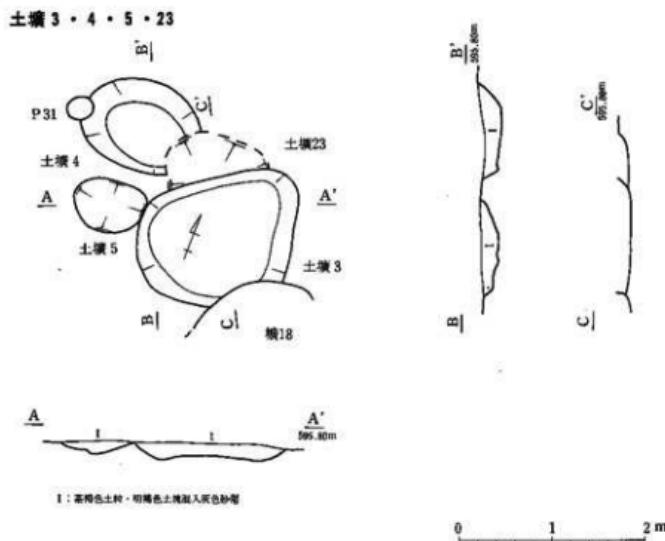
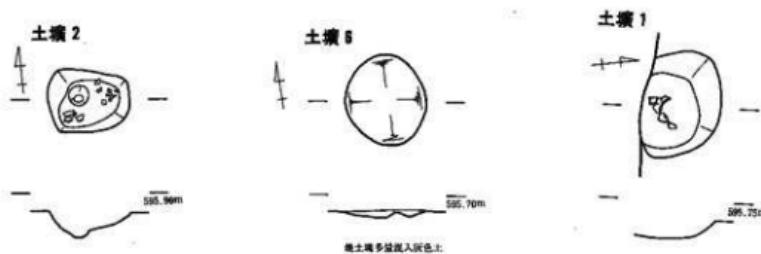
ピットは総数61個検出した。これらの規模は、最大径130×100cmから最小20cmのものまで様々であった。覆土は、灰色と褐色の2種に分類でき、これに従って土色を確認できたものののみ分けてみると、灰色が7割にもなり残りが褐色であった。ただP17には焼土が混入していた。柱痕跡はどちらも確認することができなかった。またピットの並び方には規則性がなく、柵列、建物址にふさわしいと思われるものは見当らなかった。遺物は13個のピットから得られ、そのうちP9からは完形の土師器壺が出土した。他のものはすべて土師器の小片のみで量も少ない。これらの遺物等から時期は古墳時代を中心とする時期と考える。

4 溝址

溝は1本のみ検出した。調査区を南～北～東へと走っていて、中央付近でほぼ直角に折れ曲がる。人為的なものより、自然傾斜に影響されたものと考えたい。溝幅は、最大5m、最小1.6mと場所によってばらつきがあるが、これは覆土が複雑な堆積状況をみせていることから、流路の位置が様々に変化していった結果と思われる。遺物は須恵器の完形品、あるいは土師器壺等が溝中、検出面上に見られた。これらより溝の時期を考えると古墳時代中期頃にはすでにここを流れていたものと思われる。



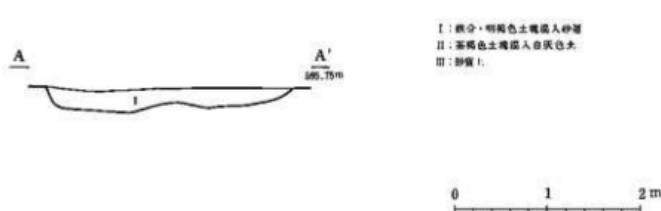
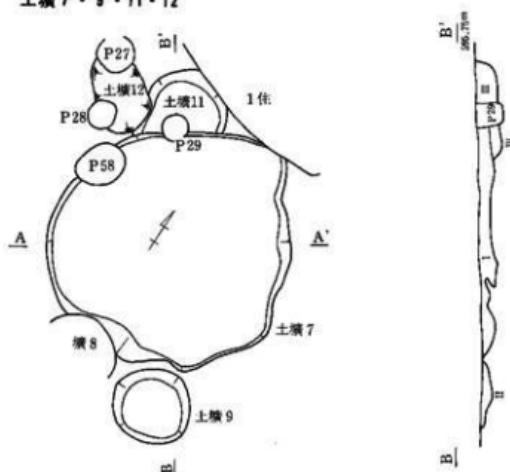
第6図 造構配置図



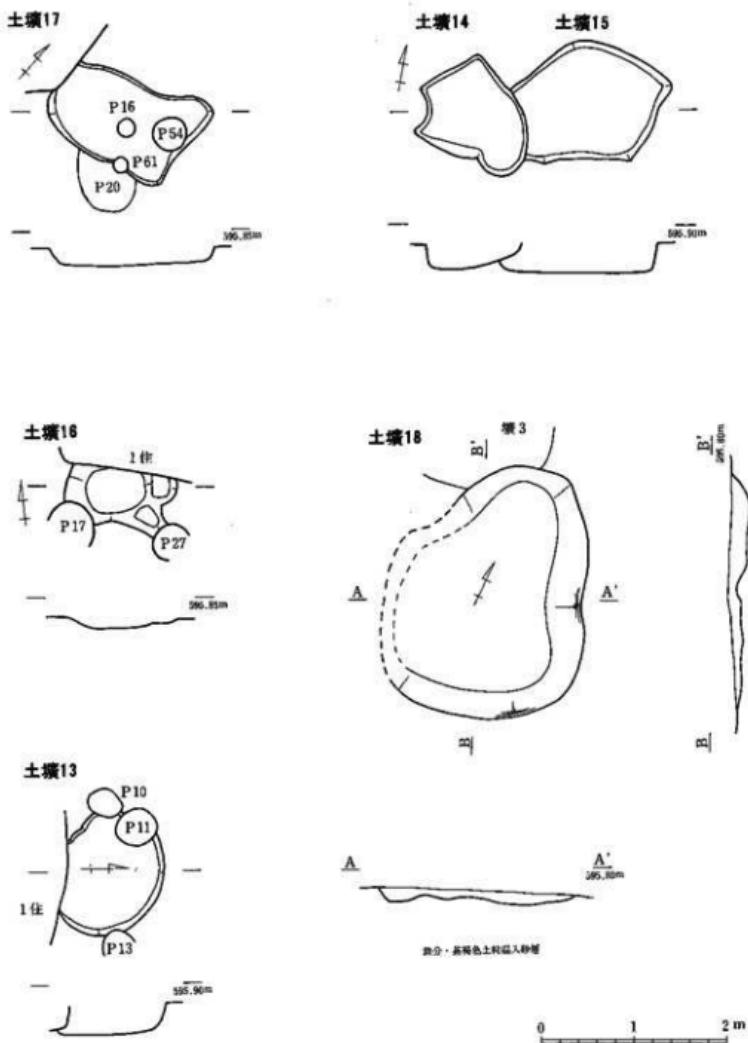
第7図 土壌・ピット(1)



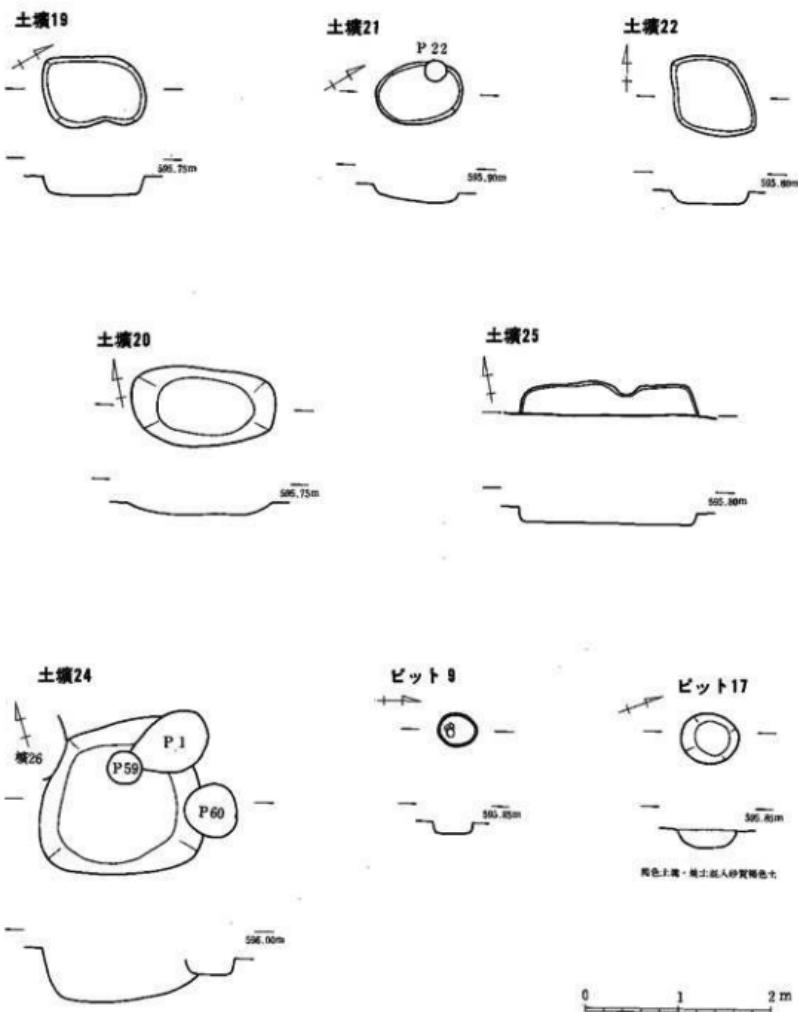
土壌7・8・11・12



第8図 土壌・ピット(2)



第9図 土壌・ピット(3)

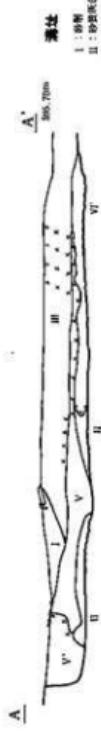


第10図 土壠・ピット(4)

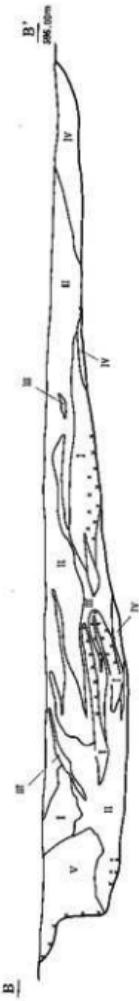
土壤一覧表

番号	平面形	規 模 (cm)	長軸方向	遺 物 (Naは遺物番号)	備 考
		長径×短径×深さ			
1	不整円形	109×(87)×21	N-70'-W	土師	一部用地外
2	不整橢円形	87×68×31	N-85.5'-W	土器Na 6	壙17出土土器と接合
3	不整長方形	165×156×18	N-54.5'-E	土師・須恵	壙18に切られ 壙23を切る
4	橢円形	(122)×98×21	N-85.5'-W	#	壙23, P 31に切られる
5	橢円形	77×56×14	N-69'-E	#	
6	円形	99×86×7		土器Na 3 + 4	
7	不整円形	274×265×14	N-56'-E	土器Na 5	1住, 壙8, P 29・58に切られ壙11を切る
8	円形	89×77×20		土師	
9	円形	90×81×19		#	
10	長方形	135×111×15	N-3'-W	#	
11	不整形	(90)×(67)×22	N-34'-E	#	1住, 壙7・12, P 27に切られる
12	不整橢円形	75×(65)×7	N-46'-W	#	P 27・28に切られ壙11を切る
13	不整円形	(131)×(103)×33	N-59.5'-W	#	1住, P 10・11・13に切られる
14	不整形	122×111×26	N-49.5'-W	#	壙15を切る
15	不整形	(159)×129×33	N-80'-E	#	壙14に切られる
16	不整形	120×(68)×32	N-83'-W	#	1住, P 17・27に切られる
17	不整長方形	(145)×109×24	N-76.5'-E	土器Na 6	P 16・54・61に切られP 20を切る
18	不整橢円形	281×227×20	N-13'-E	土師	壙3を切る
19	不整方形	102×83×23	N-28'-E	#	
20	橢円形	150×87×16	N-77.5'-W	#	
21	橢円形	90×70×21	N-33.5'-E	#	P 22に切られる
22	不整橢円形	112×83×20	N-53'-W	#	
23	半円形	(96)×(66)×(11)	N-57'-E	# 土鍬	壙3に切られ 壙4を切る
24	不整方形	184×165×58	N-80'-E		壙25, P 1・59・60に切られる
25	不明	(182)×(37)×(18)	N-(80.5)-W		
26	不明				

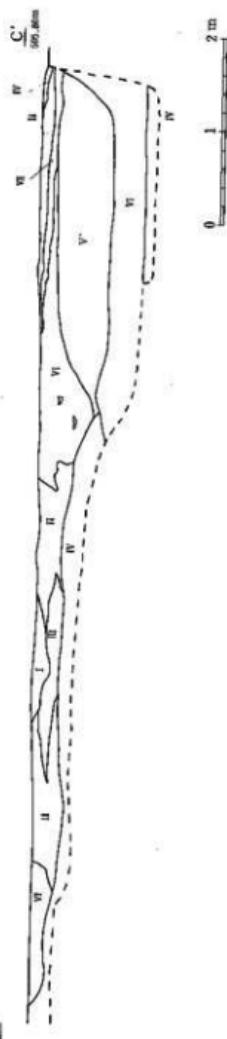
T 2



T 1



T 3



第11図 溝址

第3節 遺物

1 土器

住居址・溝・土壤などの遺構内および検出面から出土し、遺物のはほとんどを占める。しかし総量は整理用コンテナー3個と、調査面積に比べてかなり少なく、図化・提示できたものは28点にすぎない。土器の種別には、弥生土器、土師器、須恵器が見られるが、図示できたのは土師器と須恵器である。以下、図化・提示できたものについて、出土地点のまとまりごとに概観してみたい。尚、記述にあたっての土器の器種・器形の分類・名称については、同期の資料が豊富にある、市内島立地区の発掘成果を踏襲する。

1・2は第1号住居址出土の土師器の甕の口縁部と底部破片である。口縁部は強いヨコナデにより形成され、底部破片は外面ナデ、内面工具ナデで、底面中央を僅かに上げ底を作る。いずれも器壁が厚く、器面調整が難で、古墳時代後期の長胴の甕の一部であることを示している。

3・4は土壤6出土の内面黒色の土師器の坏。成形にロクロを用いていない古墳時代後期のものである。内外面にヘラミガキがかけられるが、4の外面は摩滅している。

5は土壤7出土の土師器甕の底部破片。2と同様、長胴の甕の底部一帯であろう。ナデ・板ナデで難に器面調整され、器壁が厚い。古墳時代後期。

6は土壤2と土壤17出土のものを図上復元した。今回、唯一全形のわかる土師器の長胴甕で、口径18.6cm、底径6.0cm、器高は推定33cmを測る。器壁は厚く、器面調整は胴部外面が縦の細かく弱いハケメ、内面は横の板ナデでなされるが、胴部下端の外面にはケズリが行われている。口縁の内面に、一見すると外面のハケメ原体でこすった様なカキ目状の細線があるが、同部外面は平滑さを欠いており、単なるヨコナデの擦痕の可能性もある。古墳時代後期後半に属する土器であろう。

7はピット9出土の土師器の坏。底部外面をケズリ、口縁部をヨコナデで形成した後、内外全面にヘラミガキを施している。古墳時代後期。

8~14は溝址出土品。12が土師器坏、8が須恵器蓋で他は須恵器の坏である。土師器の坏は内面黒色で、内外面にヘラミガキが施される。須恵器の蓋は天井部につまみの付かない古いタイプ(蓋A)で、天井部と体部の境界に沈線状の稜が巡っている。9~11・13・14の須恵器の坏には、蓋受けを有するもの(坏A)、ヘラ切り・ヘラケズリ痕を底面に残して無台、体部が外開するもの(坏B)、有台のもの(坏C)の3種類がある。坏Aの13・14は蓋受け部の突帯が形骸化している点や、立ち上がり部が短く外反しながら内傾するところがよく似ており、胎土がやや軟質でロクロナデが丁寧な点も共通する。いずれも底面にヘラ記号がある。坏Cの9の底面には、中央に回転糸切り痕とその外周に回転ヘラケズリ痕が観察できる。坏Bの10・11は、10の底面がヘラ切り未調整、11がヘラ切りのちナデである。器高と体部の外開の度合いが双方かなり異なっている。各個体の時期は、

8・12~14が古墳時代後期後半、9~11が古墳時代末から奈良時代に比定される。

15~28は検出面出土品。土師器の壺(20)、小形甕(25・26)、台付甕(22)、壺(28)、瓶(27)、須恵器の壺(15~18)、皿(19)、壺(23)、甕(24)と土製品で手捏ねのミニチュア(21)がある。土師器の壺は口縁部を欠くが、内面に黒色処理が施され、底面ケズリ後、全器面上へラミガキが行われている。土師器小形甕のうち25は強いヨコナデで形成される口縁部周辺しか残存していないが、26は全形を知ることができ、口縁ヨコナデのち胴部内外面に横のハケメ、底面に木葉压痕が観察できる。器壁が厚く、概して成形・調整の雑な土器である。28の土師器壺は胴部下端と底部を残すのみだが、底径12cmを測る大形品で、内面は横のハケメのちヘラミガキ、外面は纏のヘラミガキがかけられ、内面はかなり平滑になっている。27の瓶は底部全体に及ぶ大きな単孔をもつ大形瓶で、外面は摩滅が進行しているが、内面にはヘラミガキがあり、孔の周縁は面が取られる。22は土師器の台付甕の胴・脚接合部。全体的に摩滅が著しいが、脚内面に僅かに板ナデが観察できる。須恵器の壺には、底面に回転糸切り痕を残し高台が無いもの(壺D:15・16・18)と、高台をもつもの(壺C:17)の2種類が見られる。さらに壺Dの中でも、体部が底部際から直線的に外開するもの(15・16)と、2次底部を持って腰が張るような形態を呈すもの(18)の2器形がある。19の須恵器は、外形や内面の平滑な調整から「皿」として扱ったが、中央部を欠損しており、高台状のものが付くか、上下が逆転してつまみがつき、蓋の一種になる可能性も残る。底面中央には回転ヘラケズリ痕が観察される。23の須恵器は壺の底部で、底面に回転糸切り痕が残る。長頸壺になると推定する。24は須恵器の中形の甕ないしは四耳壺の口頭部であろう。各個体の時期は、断片的でかなり精度の低い推定もあるが、22の台付甕が古墳時代前期、25・27・28の土師器の小形甕・瓶・壺が古墳時代後期、20・26の土師器壺・小形甕が古墳時代後期末、17~19の須恵器の壺・皿は奈良時代、そして15・16・23・24の須恵器の壺と壺・甕類は平安時代の前期まで下るものと考えている。手捏ねのミニチュアは古墳時代後期~後期末のものに伴うのであろう。

今回の図化・提示できた土器類を一瞥すると、時期的には22の様に飛び抜けて古いものもあるが、大筋のところ、古墳時代の後期(後半)から平安時代の前期にまとまってくる。遺構ごとに見ると溝址出土のものに時期のバラツキがあるが、これは溝という遺構の性格上、問題はないと考える。

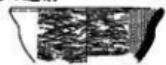
参考文献

- 松本市教育委員会 1986 「松本市文化財調査報告第38集 松本市島立南東遺跡」
松本市教育委員会 1988 「松本市文化財調査報告第63集 松本市島立東里的遺構」

第1号住居址



その他の遺構



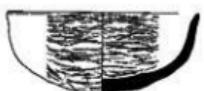
3 土壙 6



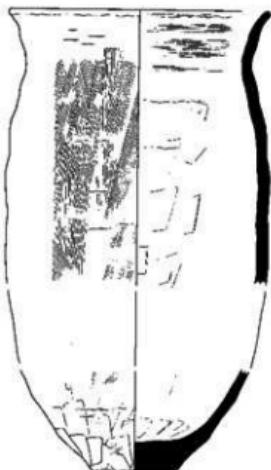
4 土壙 6



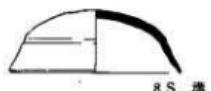
5 土壙 7



7 P 9



6 土壙 2・17

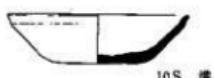


8 S 槽



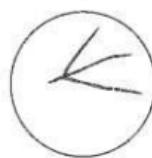
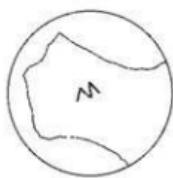
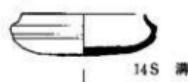
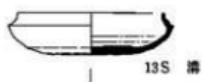
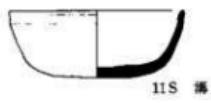
9 S 槽

0 5 10cm

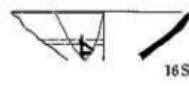
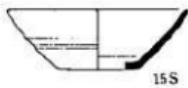


10S 槽

第12図 出土土器(1)

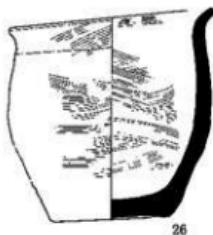
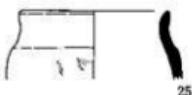
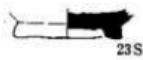


検出面



0 5 10cm

第13図 出土土器(2)

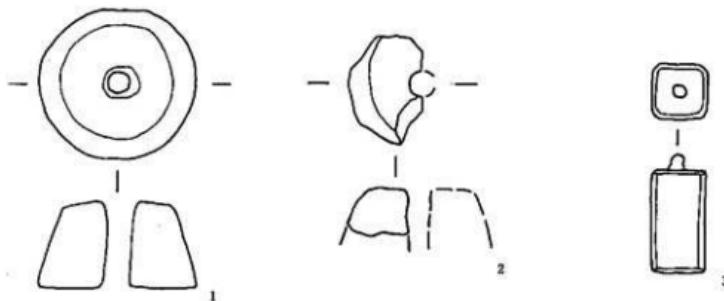


0 5 10cm

第14図 出土土器(3)

2 その他の遺物

今回の調査では、土器類が多く、これ以外のものとしては紡錘車の円盤部が2点、秤用のおもりが1点である。紡錘車は破損品もあるが、復元すると他の完形品（上径3.0、底径4.2、厚さ2.3cm）とほぼ同程度の大きさとなる。橢形円錐形で、これは一昨年、出川南A遺跡の調査（松本市文化財調査報告No.53）で得られた弥生時代後期のもの（板状、直径5~6、厚さ1cm）と比べるとかなり異なるプロポーションである。秤用のおもりとは、上皿天秤用のおもりと考える。上部中央にくびれのある小凸起が付いている。表面は鈍い銀色であるが、削れている部分に縁錆が見えており、銅製の上にメッキが施してあるらしい。重量は現在45.15gを計るが本来は50gあったのではなかろうか。近代以後のものである。



第15図 その他の出土遺物



出土土器觀察表

No.	出土場所	調 査 期	形 状	寸 法 (cm)	底 厚 (mm)	色 調	成形・調整・形状の特徴		備 考	測 定 No.
							外 面	内 面		
1	住 宅	土 器	壺	16.0	8.6	(3/3)	赤褐色	赤褐色	口縁部ヨコナフ	17
2	土 壇	壺	壺	10.8	7.8	(1/2)	赤褐色	赤褐色	網目外縁テ・内面無色工具によるナフ	18
3	土 壇	壺	壺	13.2	1.8	(1/2)	赤褐色	赤褐色	口縫部ヨコナフ・内・外縁ヒガキのち内面無色工具	19
4	土 壇	壺	壺	6.0	6.0	(3/4)	赤褐色	赤褐色	内・外縁ヒガキの内面無色工具	20
5	土 壇	壺	壺	18.6	6.0	(6/6)	赤褐色	赤褐色	網目外縁テ	21
6	土 壇	壺	壺	13.8	4.8	5.6	(6/6)	赤褐色	口縫部ヨコナフ・底部外縁ヒラヒタギキ	22
7	ビット	壺	壺	12.2	5.6	4.5	(1/2)	赤褐色	口縫部外縁ヒラヒタギキ・底部外縁ヒラヒタギキ	23
8	土 壇	灰陶器	壺	13.5	10.3	3.9	(完)	青灰	ロクロナフ・天井部底縁ヒラヒタギキ・網目ヨコナフ	24
9	土 壇	灰陶器	壺	13.6	5.4	3.5	(1/2)	赤褐色	ロクロナフ・底部開口部ヒラヒタギキ	25
10	土 壇	灰陶器	壺	12.4	7.0	4.8	(3/4)	青灰	ロクロナフ・底部ヒラヒタギキ	26
11	土 壇	灰陶器	壺	11.4	5.6	4.5	(1/2)	青灰	ロクロナフ・内面無色工具	27
12	土 壇	灰陶器	壺	10.4	7.1	3.0	(4/5)	青灰	ロクロナフ・底部開口部ヒラヒタギキ	28
13	土 壇	灰陶器	壺	8.8	3.2	3.0	(完)	青灰	ロクロナフ・底部ヒラヒタギキ	29
14	土 壇	灰陶器	壺	13.0	4.0	4.3	(1/6)	青灰	ロクロナフ・底部開口部ヒラヒタギキ	30
15	灰陶器	壺	壺	13.2	4.0	4.3	(1/6)	青灰	ロクロナフ・底部開口部ヒラヒタギキ	31
16	土 壇	灰陶器	壺	13.2	4.8	4.5	(完)	青灰	ロクロナフ・内面無色工具	32
17	土 壇	灰陶器	壺	14.0	9.4	6.0	(2/3)	青灰	ロクロナフ・底部開口部ヒラヒタギキ	33
18	土 壇	灰陶器	壺	13.6	6.0	4.1	(完)	青灰	ロクロナフ・底部開口部ヒラヒタギキ	34
19	土 壇	灰陶器	壺	16.6	14.2	1.0	(完)	青灰	ロクロナフ・底部開口部ヒラヒタギキ	35
20	土 壇	灰陶器	壺	8.2	(3/4)	赤褐色	赤褐色	赤褐色	口縫部外縁ヒラヒタギキ・内面無色工具	36
21	土 壇	灰陶器	壺	5.8	4.3	4.2	(完)	赤褐色	ナフ・底部ナフ	37
22	土 壇	合付壺	壺	7.8	(完)	赤褐色	赤褐色	脚部内面無色工具によるナフ	38	
23	土 壇	合付壺	壺	19.4	7.8	(完)	赤褐色	赤褐色	ロクロナフ・底部開口部ヒラヒタギキ	39
24	土 壇	小形壺	壺	10.4	5.8	4.0	(完)	赤褐色	ロクロナフ	40
25	土 壇	小形壺	壺	14.6	8.6	14.0	(完)	赤褐色	口縫部ヨコナフ・底部外縁ナフ	41
26	土 壇	小形壺	壺	6.6	(1/3)	赤褐色	赤褐色	脚部内面無色工具	42	
27	土 壇	小形壺	壺	12.6	(1/3)	赤褐色	赤褐色	脚部外縁ヒラヒタギキ	43	
28	土 壇	小形壺	壺	12.6	(1/3)	赤褐色	赤褐色	脚部外縁ヒラヒタギキ	44	

第4章 まとめ

この周辺は戦前は一面畠地で、戦時中自転車メーカーの宮田製作所が工場を新築し、順次社宅や諸種の工場を建て一大軍需工場として機能し、宮田町をつくっていった。その後は本来の自転車製造工場となるが昭和27年に閉鎖後、その広大な跡地は周辺の芳野・双葉町一帯とともに市南部開発の最初の拠点となった。現在ではスーパー、工場、倉庫等が密集し、調査地際は南北にJR篠ノ井線が通り、北から西にかけては小公園を囲んで3階建ての市営住宅が林立し調査地点にも約30年間にわたって、往時の日本人の平均的住宅という響きをもつ木造モルタル建てという市営住宅があり、発展途上の松本の住宅地として利用されてきていた。

遺構は南西部に集中し、ただ1基の住居址はその少ない遺物から古墳時代後期の時期を与えられている。この遺構の占地状況は東側の溝に影響を受けたものと思われ、溝は検出面より得られる遺物から古墳時代前期から中期頃に大きく氾濫してこの地に存在し、その後になって管理されて平安時代まで流下していたものと考える。又1号住居址は東に搅乱部のような屑が拡がり、溝から滞水していた湿地状の池が本址を壊していたらしく、不安定なカマドから長期間の生活はうかがえず、やはり水害によるものと考えたい。調査地周辺は現在でも田川からの小水路が見られ、水量はほとんどないが工場の水を集め北へ流れている。当時の田川の流れは以前の調査^(註1)でも平安時代の住居址を1軒水流で破壊しており、幾度となく氾濫し又、一定期間の生活の後に水が浸ってしまう事もあり、少しの場所の違いで生活に適、不適があったと思われる。

この周辺からは弥生～古墳そして平安時代までの遺物の出土が伝えられているが、弥生時代を中心は湧水を考えるとどうやら南松本駅北側西部、旧ステンレス工場跡地周辺であろうと考える。^(註2)ここから周辺へ集落が移り、出川からみると南隅のこの地へ広がってきたものと考える。ここはまた云いかえると平田の郷の北辺にあたり、平安後期～中世初頭の平田、下平田郷と推定される地域でもあり、この頃になると田川からの流水も管理され、一つ長、二ツ長、四ツ長等でみられるように条里的な水田が作られていたものと考える。

註1 「松本市出川南遺跡」 1987 参考

場所は旧マツモク構内であり、現在出川南A遺跡と命名している。

註2 昭和60年度に南松本駅北西隅で測量を実施、先史、古墳、平安時代の住居址等を調査している。又その西側では以前から弥生時代の遺物が多量に出土することで知られている。

図 版



表土除去



同 (東から)

第1図版



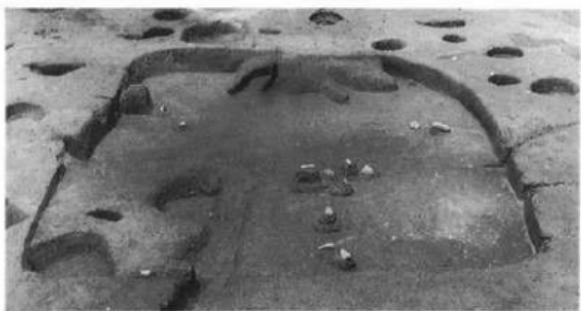
作業風景
(南側)



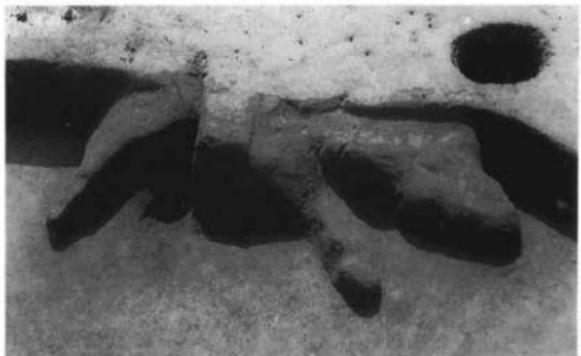
同 (東から)



同 (北から)



1号住居址
(東から)



同
カマド付近



同
調査終了後
(東から)

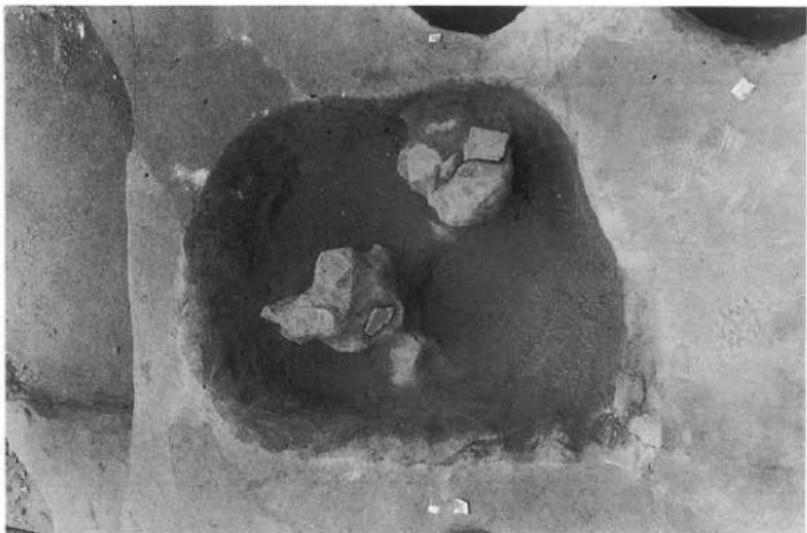


土壤 1

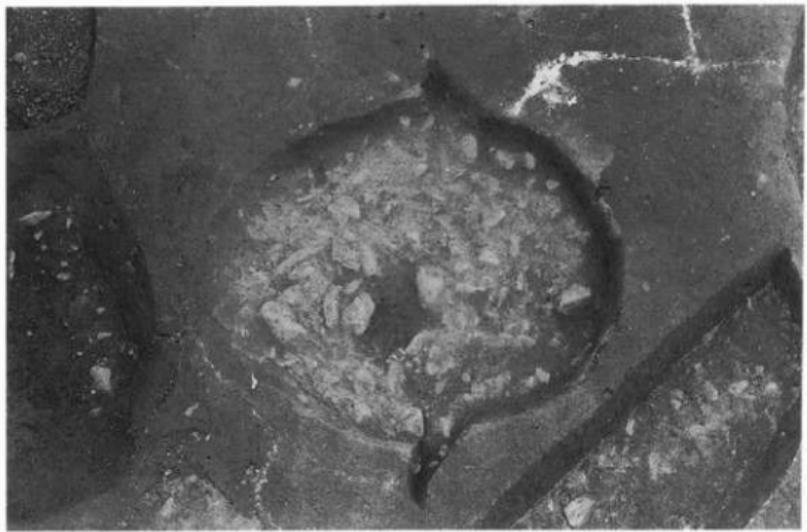


同 遺物取上後

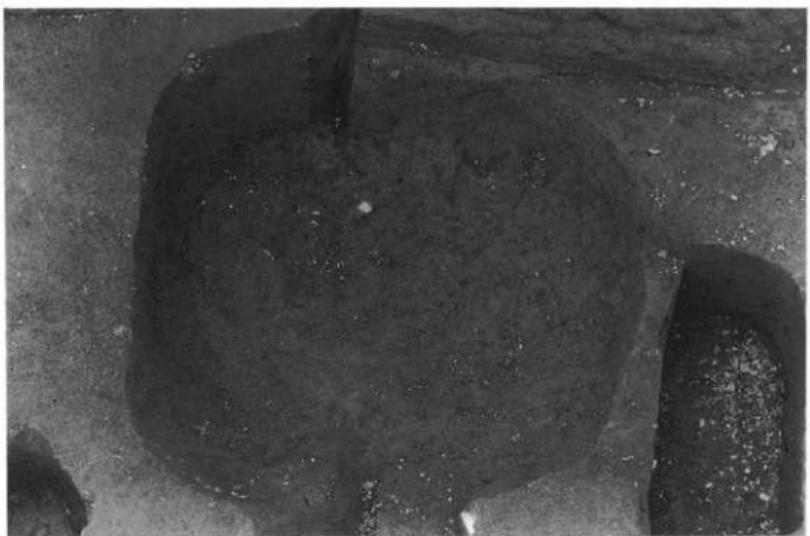
第 4 図版



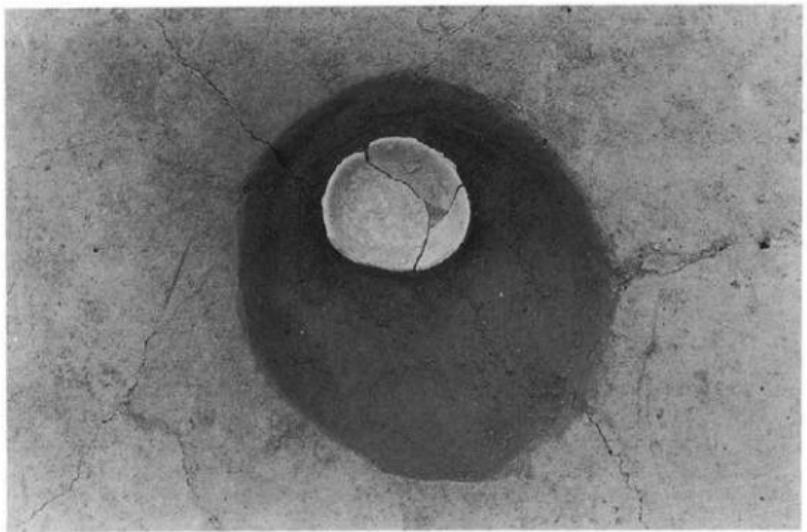
土壤 2



土壤 6 (東から)



土壤 24

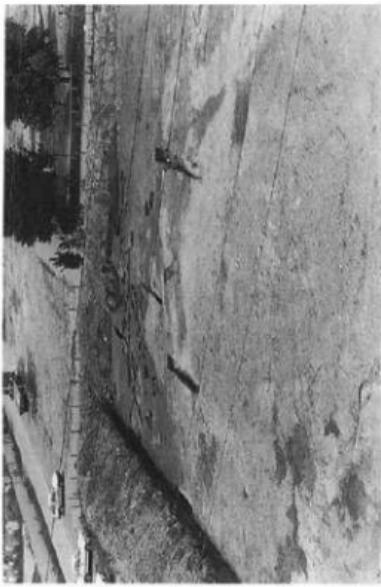


ピット 9



溝
トレンチ 2, 1, 3

(左より)



同
(右上方から)



溝1
トレンチ1
(西側)



同
トレンチ1



同
遺物出土



溝1
トレンチ2



同 トレンチ2



同 トレンチ3



発掘区南壁面 土層状況



同 土層状況



第11図版



造構と排水管



造構状況



発掘区 (北から)



『松本市文化財調査報告No.53』発掘地

第13図版



7 S



8 S



9 S

第14圖版



125



第15回版

同 底部



13 S



同 底部

第16回版



10S



17S



20H

第17圖版



27H



24H



1 土錘



3 おもり

第18図版

松本市文化財調査報告No.75

松本市出川南B遺跡

平成元年3月20日 印刷

平成元年3月30日 発行

発行 松本市教育委員会

印刷 横 総 合 印 刷
